

「群馬の万葉歌」

群馬県立女子大学 北川和秀

◎万葉集卷十四（東歌）の配列

国名判明	雑歌 5	上総 1首 下総 1首 常陸 2首 信濃 1首	} 東海道 - 東山道
	相聞歌 76	遠江 2首 駿河 5首 伊豆 1首 相模 12首 武蔵 9首 上総 2首 下総 4首 常陸 10首 信濃 4首 <u>上野 22首</u> 下野 2首 陸奥 3首	
	譬喩歌 90	遠江 1首 駿河 1首 相模 3首 <u>上野 3首</u> 陸奥 1首	} 東海道 } 東山道
国名不明 140	雑歌 相聞歌 防人歌 譬喩歌 挽歌	17首 112首 5首 5首 1首	

合計 230首

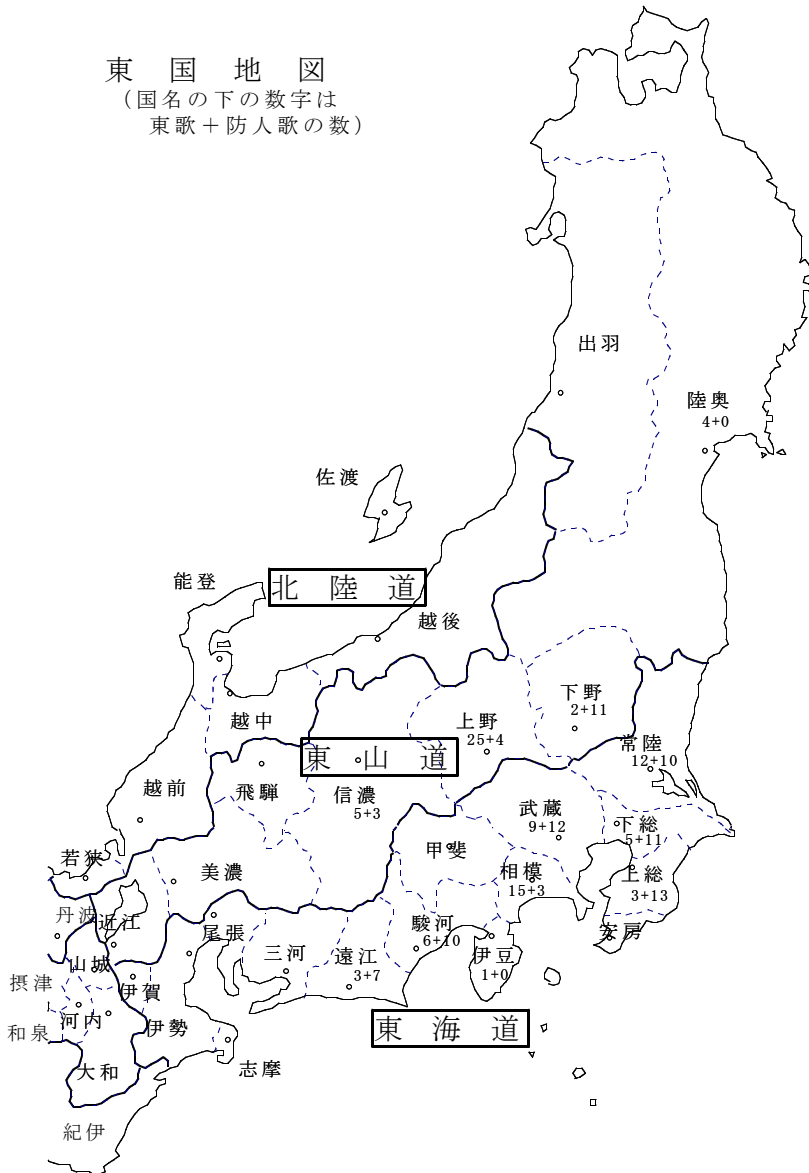
◎万葉集卷二十・防人歌

①天平勝宝七歳乙未二月、相替りて筑紫に遣はさるる諸国の防人等の歌

遠江国	7首 / 18首
相模国	3首 / 8首
駿河国	10首 / 20首
上総国	13首 / 19首
常陸国	10首 / 17首
下野国	11首 / 18首
下総国	11首 / 22首
信濃国	3首 / 12首
<u>上野国</u>	<u>4首 / 12首</u>
武蔵国	12首 / 20首
84首 / 166首	

②昔年防人 … 8首
合計 92首

東国地図
 (国名の下の数字は
 東歌+防人歌の数)



◎上野国の東歌

3402 日の暮に碓氷の山を越ゆる日は夫なのが袖もさやに振らしつ

碓氷の山をあなたが越える日は、あなたも袖をはっきりとお振りになった。

3421 伊香保嶺に雷な鳴りそね吾が上には故はなけども子らによりてそ

伊香保の峰に雷よ鳴ってくれるな。私にとっては別にどうということはないけれども、あの娘が怖がるものでね。

3422 伊香保風吹く日吹かぬ日ありと言へど吾^あが恋のみし時なかりけり

伊香保風は、吹く日も吹かない日もあると言うが、私^あがあなたを思う恋心ばかりは、止むときがないことだ。

* 参考「韓^{からどまり}亭^の能^こ許^のの浦波立たぬ日はあれども家に恋ひぬ日はなし」(3670番)
「荒津^{あらつ}の海潮干潮満ち時はあれどいづれの時か我が恋ひざらむ」(3891番)

3423 上毛野^{かみつけの}伊香保^ねの嶺^ふろに降^{よき}る雪の行き過ぎかてぬ妹が家のあたり

上野国の伊香保の峰に降る「雪」ではないが、たやすく「行き」過ぎることができない、あなたの家のあたりよ。

* 参考「わが屋戸^{やど}の君松の木に降る雪の行きには行かじ待ちにし待たむ」(1041番)

3420 上毛野^{ふなはし}佐野^{はな}の舟橋^さ取り放し親は離くれど吾^わは離るがへ

上野国の佐野の舟橋をばらばらにしてしまうように、親は二人を引き離すけれど、私はあなたと離れたりしない。

3418 上毛野^{さのだ}佐野田^のの苗のむら苗に事は定めつ今はいかにせも

上野国の佐野のたんぼの苗を使った占いで結婚を決めた。今さらどうにかできようか。

3406 上毛野^{かみつけの}佐野^くの莖立^{あれ}ち折りはやし吾は待たむゑ今年^こ来ずとも

上野国の佐野の青菜を折って料理を作って、私は待とう。たとえあなたが今年はこなくとも。

3403 吾^あが恋は現在もかなし草枕^{まさか}多胡^{たご}の入野^{いりの}の将来^{おく}もかなしも

私の恋は今も切ない。そして(多胡の入野の奥ではないが)将来^{おく}も切ないことだ。

3411 多胡^{たご}の嶺^ねに寄綱^{よせつな}延^はへて寄すれどもあにくやしづしその顔よきに

多胡の峰に引き綱を掛けて引き寄せるように、頑張って言い寄ってみたけれど、あ
あ、憎らしいよ、水底に沈んでびくともしない石のようなやつめ。（ちっとも靡か
ないでさ。）いくら顔が美しいからって。

3404 かみつけの あそ まそむら むだぬ ああ 上毛野安蘇の真麻群かき抱き寝れど飽かぬを何どか吾がせむ

上野国の安蘇の麻の束を抱きかかえるように、あなたを抱き締めて寝ても、それで
もなお満足できない気持ちをいったい私はどうしたらいいのだろうか。

3414 やさか めで のじ あらは 伊香保ろの八尺の井手に立つ虹の躰ろまでもさ寝をさ寝てば

伊香保の高い井堰の上に現れる虹がはっきりと見えるように、そのようにはっきり
と二人の仲が明らかになってしまうほど一緒に寝ていられたらなあ。

3494 こもちやま わかかへるで もみ わもな あも 子持山若鶏冠木の黄葉つまで寝もと吾は思ふ汝は何どか思ふ

子持山の若いカエデの葉が秋になって色づくまで、あなたと共寝をしたいと私
は思う。あなたは どう思う？

3413 ただ 利根川の川瀬も知らず直渡り波にあふのす会へる君かも

利根川の浅瀬がどこなのかも考えずに、やみくもに渡って波を受けてしまったよう
に、ばったりと出会ったあなただこと。

3540 さわたり てご あが こと 左和多里の手見にい行き逢ひ赤駒が足搔きを速み言問はず来ぬ

左和多里の乙女に出逢ったけれど、私が乗る赤毛の馬の歩みが速いので、言葉を交
わさないまま来てしまった。

3560 まかね にふ まそほ で あ 真金吹く丹生の真朱の色に出て言はなくのみそ吾が恋ふらくは

鉄を精錬する丹生の赤土のようには、はっきりと表に出しては言わないだけだ。私
が恋しているということは。

* 参考「しらまなご みつ はにふ白真砂御津の埴生の色に出でて言はなくのみそ我が恋ふらくは」（2725番）

3405 ^{かみつけのをど}上毛野平度の^{たどり}多杼里が川路にも子らは逢はなも一人のみして

上野国の^{をど}平度の^{たどり}多杼里の川へ行く道で、あの^こ娘が逢ってくれたらなあ。一人だけで。

3405或本 ^{かみつけのをの}上毛野小野の^{たどり}多杼里が^{あはち}安波治にも^せ夫なは逢はなも見人なしに

上野国の小野の^{たどり}多杼里の^{あはち}安波治でも、あなたが逢ってくれたらなあ。誰にも見られないで。

◎上野国の防人歌

4404 ^{なにはち}難波道を行きて^く来までと^{わぎもこ}吾妹子が着けし^を紐が緒絶えにけるかも
右の一首は、^{すけのよぼろ}助 ^{うしかひ}丁上毛野牛甘のなり。

難波への道が無事に行って帰ってきてくださいと言って妻が縫い付けてくれた紐がついにすり切れてしまったことだなあ。

4405 わが^{いもこ}妹子がしぬひにせよと着けし^わ紐糸になるとも吾は解かじとよ
右の一首は、^{ますひと}朝倉益人のなり。

妻が、思い出すよすがにしてほしいと言って縫い付けてくれた紐は、たとえすり減って糸になっても私はほどいたりするものか。

4406 わが^{いは}家ろに行かも人もが^や草枕旅は苦しと告げ遣らまくも
右の一首は、^{ふし}大伴部節麻呂のなり。

わが家に行く人がいてくれたらなあ。そうすれば、私が苦しい旅をしていると家族に知らせてやれるのに。

4407 ひな^{くも}曇り^{うすひ}碓日の坂を越えしだに妹が恋しく忘れぬかも
右の一首は、^{をさだべのこいはさき}他田部子磐前のなり。

二月二十三日に、上野国の防人 ^{さきもりのことりづかひのだいさくわん}部領使 大 ^{たてまつ}目正六位下上毛野君駿河が進める歌の数は十二首なり。但し拙劣なる歌のみは取り載せず。

碓氷峠を越えるとき、彼女への思いが募って、もう忘れるなんてとてもできないことだなあ。